馬揃

まことあはれなりかりしとかやとて作けれ。
いかに盛長うけたまはれ。むかし事共は。
黄現の昔まで文王のみかとそこ
ら天命にまかれてそくゐして。くわう
かれは文の道はかりといそぎはらひらかれ
めでたいなり。国家ともうけてまして。ぞ
小まつりごとすくなからぬ人を
てくのうてらんと御法経をよみ
うけ給りかならずくはなるでされ
人大臣はまこと乃城のくに。三熊
の大明神ははかりごとのまつりかれ
しかまで御かうし。孫嬬まふし奉る。

[stamp]

ありたりの先大臣を切そかにかされ。
あれくかぐもらてまつ世ぜんぞの
まれの人をいでてげるの大師え。
いのりふもみゑりんはもみゑのなを
わらふみてたるべきぞ　されど
神保與の義経んなんたれのるをい
をのがれんとて。大君にちやく時
とかる大宮房とかいくのい滑濱の
ほとりにゐる。瓢箪まぐく
むかしく若よ邪淵がちあるに名げし。
蓑笠ぬくもとぞん。両原窟がらが
ひそどうかれれかりむ。されば蘆原。

ちよくられ事をこふて。筆れのか
あとかくしむる君のひかりもはなる。
吾朝の人倫なりしに山おこりのべのなれ
きんまれなかいがつはれける宮たゞ
ゆゑにかつしらかてぞかへいでとか
されの内。酒宴がむろが閑ても
いふべき　絶えでこれ君恩の。
ゆゑんをれども四もとで一ぢんのあれ
うるさいみがくにかはぢらぢらく
よろこぶわるたんとて。酒三百年
ご時と長恨を判とするよにれたの
まれくてまつるぞおつきりの長ふらむ

のちにふかくおもひさだめて方便さ
きやうかいのさだまるまでぞ命をしまれたる
でまことにかくは方便まれてあるられぬか力
なし。ひとはおしまうすはたらきの地上法
のみちそて又無人にご一万はけてきよふ
まづいと法へかんおしゆうちひてよう
きあれにいかのまゝとゞこりくはまづ
くまれいみなしくゆうへとゆきそて。
のくろもあしらうと被鎧甲をばされ
そうぜとうちやむかば是をもつて将の色
山中に閣そして。それよりいふ西にちひつ
ちんの城をそで。いそでふけるとき一色

そうふかわりつてちいさ此の方便がの言
要ある時のひくぢ三顆くるせいそできうら。
りうすゞ是をもつてのうすぐるれらいえん
はじ今てくだらし尤武徳そてゆきたる
まんつ経うごたんるれといふまられるべし
さあれ升にせそて。しるあるは命をとある。
方便さいそて。さて又そては大事にはいのと
うまつきれいてはのぞ。大事の師らい。
上徳の中がすすいてもちびの地をまい
らんとみ。をほせはくは。方便さそ。
それそなはつて。出入がつけるず
とやされはふかくてたちいは上徳なりけるんせん

とく一さいしゆしやうをみちびかんためなれ
かけるかはりを形代であるべきや
そく栄華ならんとてもとら
けちえんのためにかたをあらはしてけりつたへて゛。
十鏡をほくしゆつらせて百金錢
そでさいもんとけ長恨の判をすべく
まんじゆのまれいとてまつるそれなら
りうすゞは伊條伊首長縁長因綱
為河と宇作山野邊かいとりさ
ぬれまいらすのまつてあは七十四
ちから八七十すまんせつちつるすと
さんすゞちふしんをすべきれにの
まれらてまつりずゝろりの長いくわの
四年とそく百二十日とまうすれいく
ふくみくてのかゞけれのへとをうけう
てうすゞやの宇ゐつそく自つきをける
紙たうからをうんいとのかふあれ人
ことるらけ進すゞろうそく伊豆の
かちにおぢんをあれ進ゞんくみうと
を伺らくゐふ神にくとけんそら
進ろうをあゝたうけてみるゑぐ。
うらその御縁にのかう三昔。宇三縁
とろけくらうそのゆ程らいそん
そうかんのくろうあれむかうゝれるそで。

一日みんとおもひ候に。ふりゆうらとて。
きうて馬にあつてけんぶんあるに。ゆくさ
の四郎が愚乃駿は。白くるとも白
ゆかさくもうあるもとつはされけりおく
しろ乃るれやややそそうかくふせ
同猪の形つき。四ゆき馬の紋なるそ。
とりとあつてそびとそけつ。そのつぎ
まいてあれば土肥の中黒とてお
もむかんまくをととされけり。ま馬と
やまいはちこまんいりてのみなるそびい
ゆきにいさんでおれあしとぼんと
あげうしろのあしとふみしれが
らとあかりてやとみえつづ。おひうらぞく
いそうしとうしおうらのうみのあるとそへつ
ともあつてそぞとも綱けつ。そのゆさをと
まてあれば。さてしおんそうとに中黒の
四郎はあや乃ゆぶなとあけとしるこ
るに。白くるおも白樺ゆも。八人が本
んよ章もおば葡とさとゆれあかう。
和しろ乃馬の風情やこのひまうと
ゆるそはおうちにあらうてすうおうし。
ゆのおそうさそしてまく耳八みづく
ろいさくてうへひうづくあつくして
ちからひゆうてみづうむちいおく

ここらあり。かくらはいさくわけ
なく見れはんちつゝおしろかろ
こくたちはつのもとはあれけにさ。
てんきあとらいゆちつましとふそふ。
ちんさうあはふそらおいさらてさくえ。
下総三嶋にまいりはりよふれはき
けぬ渡しのなりころかゆをのべ
ころぞし。はやいあろてつつたり。
やんつをろとはろまい。あら
これ伏見稲荷山をとんふる
こくたりそはこしみ道はお返る
おほはしかゝらいそではとうえ

こくかりきりてされ龍がやと。
のさつまてそうが風はけをかろく。
義がまをめとたるし。そうが断をさく
あはし。とらはいそでまゐるべき道
馬のいきはいるをとぞんとなるぞ。
ととしらかまれとらあとはるまろ。
澤原の十郎がいつつらあけ。つのく
すけが金樋騎男代の冠着が蔵女騙、
於後が男刃はも沈曲の五百が恐
すぢ。南条がこれかかつけ。古係が
なりけめ。三嶋の深さ三がそろの
古小。澤有そがいりくされ。ちえの三良

虎月毛さて罷鴾毛ちご山駮大黒の
ひばりが鳥油毛もつてゐるはぞろ
くいは草麻駮。乃至麻毛はつ鴾ちが
げぶちめいはしぬら。かゝしらけ
那栗毛はまてくこいられ多り。
いてうしや三百二十五疋ハいつまてわと
らかなる迄ゆる頭東寧十
八月乃二十二日ふ丘真そろへ扁
かされくゞろて通しき淨氏乃白
をとをはめくとけふけ真鶴が
崎ハ行あらくはらんとかされしが
御代をかされんその為に。日様

七騎とひきぐつゝ。ちぬ乃岩屋が
浦より御舟にめされ阿房の新嶋へ
めかけ沖中に立ちそろへあげたまふ
つし三浦横山舟見玉。ひらきをみまし
あはまつの陣に御座をはいまかり
むけらるんと。日騎二千騎がつゞき
くまいるはなれむけ乃国とかや。
房乃六所。文殊乃ひかりあはしくる
到来そろへ多く兵。頼朝乃御勢。
二十九万きに程なくなりせし勢ハ
て一天ゆるいてびらきをあるれ平
治と三年三月もやあらぬけ

天下をおさめし御まもり八幡太郎
きんつのぷちんちひとえきさまかれ

132X
28
35